

京都秋期福音特別集会（1）

天国人の素質 ——イエスの天国——

——マタイ伝第5章3～12節——

1967年11月4日

小池辰雄

御霊に導かれている事態 聖書は活劇の本 魂がない人はいるか イエスの突き抜け 天ひらけ神の御霊降りて 聖霊のバプテスマ 無素質・無条件 無条件であることが義 放蕩息子はイエス イエス自身が天国人 神の現在に自分が関与する 無いのが幸いだ 天国人の素質は無 十字架という門 入れば御霊の世界 聖霊は慰め主 世界に大和をもたらす大使命 天国人が仏法僧 信は義のもととなり キリストの愛憐が流れていく 至る所これ天門

【マタイ5】

- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。
- 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

●御霊に導かれている事態

私は七、八年前からこちらのIさん、Oさん、Kさんと思わぬ縁によりましてお知り合いになって、ほとんど春と秋におじやまにうかがっているわけです。年がたつにつれてこの交わりが深まって、大変私はいれしくまた感謝しています。

京都はご承知のごとく日本の仏教の伝統的な都であります。非常に宗教的には縁の深い都で、ここに新島襄さんが同志社というものを建てて、また福音、キリスト教の歴史もかなり長いのであります。九州は非常に、ご承知のごとく、まずカトリックが入ってきた。それからプロテスタントが約百年前に熊本にジョーンズという陸軍の砲兵将校が来てそこに



伝道を始めた。また、日本の真ん中は東京ではなくして、横浜に四人の宣教師が来て、大體同じ頃にキリスト教の伝道を始めた。また、札幌には有名なあのクラーク先生というのが、「ボーイズ ビー アンビシャス」（青年よ、大志を抱け）の一言を残して一年そこそこで——八か月でしたかね——去られた。とにかく、日本に三か所、プロテスタントが入ってきて、その九州からこちらの京都の方に乗り込んできたという歴史があります。

その歴史の発するところの現象を見ると、みな御霊に導かれている事態であります。それがなにか硬化現象を起こすと、だんだんダメになる。そこに、まだ世にはあまり知られていないこのお三人がまた京都に新しい火を点じ始めておられると、こういうわけであります。神さまの目からみると、この小さな火が実はあなどりがたいところの火であると思うわけです。そういう集会でこれはあるんです。

どうぞ、そういうわけですから、いらつしやった方々は、ただひとつのキリスト教の集會に今日は行って見たなんて、そんなことではないということ。私はそのお手伝いにかがっている。そういう歴史的な自覚を皆さん持っていたらいいと思うわけです。

●聖書は活劇の本

今度は、「イエスの天国」と題しまして、三回お話をうけたまわるわけですが。どうぞ、この聖書というものは決して——よく「研究会」というのがありますが——研究してわかる書ではない。研究してわかる部分は、ごくそれはうわつかわることでありまして、聖書の内側の生命の事態は研究できない。いくら解剖学をやりましても、生ける人間そのものは解剖学の分析の中からは出てこないと同じようなぐあいに、この聖書は活きた文字であります。活字といいますが、本当にこれは活字なんです。活きた文字。聖書は文字通りの活字であるので、この活字の活字たるゆえんをつかむためには、研究は単なるひとつの二義的、三義的な補助手段にすぎない。研究なんかなさらなくても差し支えないのであります。

「ギリシア語、ヘブライ語で、また参考書を読んで研究する人がより深く聖書がわかる」

なんて思ったら、それはとんでもない間違い。日本語で結構です。また所々に誤訳があっても結構。だいいち聖書そのものが決して完璧なものではないので、不完全な書です。眼光紙背に徹するといいますが、文字の活字をしてその本質をつかむためには、活字の奥の、ギリシア語ヘブライ語の奥の、日本語の奥の、源語——これは本当の源語です——これは誰も知らんです、そんな源語なんてものは。そういう言霊ことだまをもつてしかそれをつかむことのできないような、その言霊の世界、霊言の世界をつかむ。そういう角度で立ち向かっていく。ではそれはどうしたらいいか。



聖書は教えの本ではない。教えだなんて思って、
「キリスト教」

なんていうから、そもそも躓きになってしまっているの、これはドラマなんです。活劇の本です。神さまが、このしょうがない人間の世の中に、混沌たる――「混沌」とはヘブライ語で

「トーフー ワー ボーフー」

なんて全く混沌のような響きをもった字ですが、その「トーフー ワー ボーフー」という混沌の――人間の世界に本当の秩序を、コスモスを、神的な秩序をもたらそうと思って、また、亡びへ向かっている事態に対してこれを救いあげよう、生命の本当の光の世界に変えていこうという、すべてこの悪しきもの、暗きもの、曲がれるものをよろしきものに変質変貌させていくところの、そういうドラマである。

だから、自分もそのドラマの中にひとつ入りこんで、神さまに聞き、神さまにひっぱり回され、つかみかかられてと、そういう角度で体当たりでこれに向かつて行かなければ、何年やってもダメなんです。そのかわり、体当たりで行ったら、もうどんどんその世界に入れる。絶対無条件に入れます。

どうぞ、そういうことです。なにかもしこだわりや先入観があったら、そんなものは全部すつ飛ばしてしまってください。あるがままの自分を――決して気負うことはないです――あるがままの自分をその中に投げかける。そういう態度でこれに向かつてください。そうしたらば、人間のいかなる哲学も文学も芸術も事業も学問も、与えることのできないものを聖書は与えようとしている。いかなるこの世の素晴らしいものがひと一人の間を救うことができるか。できない。我々はみな救いを要する人間であります。

「私は救いを要しません」

と本当に公言することのできる人がありましようか。ないはず。これは人間が人間を救うわけにいかん。人間以上のものでなければ、人間を救うわけにはいかん。

●魂がない人はいるか

私はこないだ大学で、

「万人は宗教人である」

と題してお話をしました。およそ心があり、魂があるかぎり――

「心、魂というものが私はありません。私は肉体だけです」

と言える人がありましようかね。おそろくないと思う、どんな唯物論者でも。

「私には心がありません、魂がありません」

と、そんなものは人間ではない。バケモノであるかもしれない――心や魂があるならば、それはもう既にそのことが宗教人であるということです。



仏教でも、

「衆生 悉く仏性あり。山川草木悉く仏性あり」

という。万象には仏性があると仏教でもいいます。パウロは、

「神は万のものの上にあり、万のものを貫いてあり、万のものの中にある」

とはつきり言いました。そのようなことでありまして、万象はそういつたある絶対的なものによって貫かれている。物理の世界でも、宇宙線とかいうものが我々の身体をしょっちゅう通っていて、穴だらけなんだそうですね。宇宙線ではなくて——神の霊線といいますが——神の霊線が我々をしょっちゅう宇宙線にまげずに貫いて生かしている。

そういうことに気がつくかどうか。ソクラテスは、

「哲学はその人の中にあるものを引き出す。私の哲学は産婆役である」

と言いましたが、私も皆さんの中にあるものを——皆さんの中にあつて、もしお氣が付きなつていらつしやらないなら、その氣がついていらつしやらないものを——どうぞ、氣がついてください、引き出してください、そして大いに育ててくださいという、ご助言をいたすだけのはなしで、私がここから何か教えたりなんか、そんなことは私は御免こうむります。

私はそういう「教え」という字は、「教師」なんていうのは大嫌いなんでね、私は学徒、学ぶ徒弟であります。皆さんと一緒にこの絶対者から学ぶことあるのみです。また、それについて語るのではなくて、その中から告白することあるのみなんです。何々についてお話ししても、それは皆さん面白くない。私は私の中にあるものをただぶちまけるというだけのはなし。それを受けとろうが受けとるまいがご勝手にござりますが。

とにかくしかし、魂の世界はごまかしがきかないので、もしそれが本ものであつたらば、何か響くだろうと思つてます。語るも聞くも同じこと、その絶対的な何ものかに共感を感じて、この集会を進めていこうというわけです。

●イエスの突き抜け

「イエスの天国」なんて題しまして、大きな題を出して、私も実は自らとまどつています。イエスというひとが出る前にはもちろん、ユダヤ教というイスラエルの宗教があつたわけです。イスラエルの宗教というものは、おおざっぱに申しますと、もちろん個人から発しています。アブラハムというような個人が呼び出されて、神さまのみ声のままに、またみ腕のままに動きまた歩いてきた。また、預言者たちがそのようにそれぞれ引つ張り出された。自由に語らしめられていた。という面がありますけれども、非常に集団的な事態が強かった。アブラハムといひましても、アブラハムの一族とアブラハムとは離すことのできない自分のひとつの群れというものです。離すことができないような歩き方をした。

だから、詩篇23篇にもあるように、



「エホバはわが牧者なり。われ乏しきことあらじ」

というときの「われ」というのは、神は牧者であると同時に羊の群れを共にしたところの事態をまた言うわけです。群れと牧者というものは離すことのできない、族長と族というものが離すことのできないような関係にあります。集団的な事態。それが今度は、非常にまた民族的に非常に強い意識を持っている。そこで「選民」というような、エホバの選びの民であるというような、そういう選民意識も非常に強い。それが強すぎると、排他的になるというのが正直、ユダヤ人の持っているひとつの、ある意味において頑なな性質であるかと思う。

そういった民族的な、そしてそれが国家を形成すると今度は、政治面が出てきますけれども。そこで預言者たちがどうしても政治の問題に信仰の角度からタッチしなければならぬという事態が出てくる。その意味において旧約の預言者たちというものは非常に政治的な事態に対して関心をもち、またそれとつくんだ人です。使徒たちの中には、キリストの弟子たちの中には、そういう角度の使命はなかったわけです。もう既に国家がありませんから。

そういう民族的な、あるいは国家的な、あるいは集団的な、そういうような性質の強かったまだ民族宗教であったのが、イエスに來ましたら、その民族的なもの、まだ集団的なもの、そういうものを突破した宗教に今度は出てくる。そういう突破をするためにはどうしても、もう一遍深く個人的なものにならなければならない。個に徹するというと、普通の世界に入ってくる。

そういう意味において、イエスの宗教の特色は非常に個人的な、個人的なものであると同時に、ユニバーサルな、普遍的な、そこでまあ世界的な宗教にもちろんなっているわけでありすが。そういう突破がイエスにおいてなされたという事態です。では、その突き抜けというような事態が——今日は、

「天国人の素質」

なんて書きましたが、「素質」というのは一体どういう意味で言ったかということはあるんだん明かになってくるでしょうけれども——まず、イエスというひとを見なければ話はどうにもならぬ。だいいち主題は「イエスの」ですから。

●天ひらけ神の御霊降りて

そこで、イエスというひとを——福音書全体にわたったら大変なことになりますけれども——ポイントだけをつかんでいかなければならないわけです。まず、一番著しいのは何といっても、受洗の場であります。キリストが洗礼を受けた場です。マタイ伝3章16節、あるいはマルコ伝1章9節、ルカ伝3章21節。そういうマタイ、マルコ、ルカ共通の——ヨハネにももちろんあります——記事を見ると、どこにも



「天ひらけ」
とか、

「天裂けゆき」

とかいう言葉が書いてある。イエスがバプテスマのヨハネから受洗されて水からあがると、
「天がひらけた」

と書いてある。一体、「天がひらけた」とはどういうことか。天はしょっちゅう開かれていますよね。窓も何も無い。昔のイスラエル人は天に窓があると思って、天の上の水はその窓の穴を通して降ってくる。それが雨なんです。けれども、もちろんこの場合には、「天ひらけ」というのはいわゆる天の岩戸が開かれたのでも何でも無い。霊界の天が開けてきたことをいうのであります。

「¹⁶イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、
神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。」（マタイ3・16）

という事態が起きた。それはただ忽然としてきたのではない。

イエスがそのような事態にたち至るまでの、青年時代のイエスの生活は何であったか。仕事はなにか大工のまねをしていたようですが。なにしろイエスというひとは専門家ではないですから。素人です。イエスというひとはまことに素人です。今はたくさん専門家がありますけれども、イエスのときの専門的な宗教家がいたのだけでも、イエスは素人です。この素人が専門家に勝つわけです。

何をしていたかというのと、我々にはわからない。わからないけれども、わからなくてもちゃんとわかることがある。それは何かというのと、彼は深い祈りのひとであった。イエスも祈りのひとでなかったらば、イエスは決してこのようなことにならなかった。これは歴史で考証しなかったって、これはもうはつきりしたことです。いかにイエスというひとが祈りのひとであるか。

祈りというのと、一生懸命でなにか熱心にただお願いをしたかなんて思ったら、とんでもない間違いです。祈りというのは自分を神さまに全托することを祈りという。

「このお願い、かのお願ひ」

ではない。そんなものは祈りの枝葉や葉っぱくらいなものです。祈りの祈りたることは全存在を神さまの中に入れてしまう。イエスは中へ入ってしまう。彼自身がすなわち祈りそのものである。内接的に神の中に入ってしまったのが祈りです。

「なかなか入れません」

なんて言っただけ、そんな取り澄ましたって入れませんよ。あるがままに自分を本当に投げ出す。自分を本当に投げ出すことが無私、ということなんです。無私ということになにか非常に悟りの世界のように思っているかもしれないけれども。私の無いということとは、

「こつち側にもう自分はありませんよ。私はこつち側にいませんよ、あつち側（神・



キリスト)に入りましたよ」

というのが無私ということ。虫のいい話のようですが、あるがままの自分をそのまま投げ出す。分裂なら分裂のまま、頑ななら頑ななまま、自分を投げ出して、

「どうにもなりません。どうぞ」

と言って、神に明け渡す。そして、神の世界に入る。中に入りましたら、彼自身が光になる。光となるためには光の中に入らなければ光にならない。

お月さんなんてものは太陽の光をただ表面で反射させているだけで、ちつとも本当の光ではない。あれは光の影で、光そのものはお天道さんである。地球もダメだ。原子核爆発でもやっているやつでなければ本当に光にならない。太陽は核爆発しているんですよ。

● 聖霊のバプテスマ

イエスは神の中に本当に自分を入れてしまつて、そしていよいよ——洗礼のヨハネでもつてとにかく一応洗礼を、悔改めを受けましょうと。悔改めの必要はないんですが、しかし、これは悔改めの必要ある者たちのために自らその場に立ったわけです。その場に立つ必要のないひとが、どうにもならない人の場に立つこと——それに同情するくらいのことではない——その身代わりをすること。身代わりとなつてするのが本当の同情という。共に悩む。悩みを共にする。私たちは人間の同情を得ますけれども、お友だちにいろいろ同情しても、いわゆる同情くらいではどうにもならん。本当にその悩みをその人が負う。そのためのイエスのバプテスマであります。

悔改めとは方向転換である。改心というのは心をひるがえす。心をめぐらすこと。

「ああ悪かった。悔いて改めよう」

なんて、またダメですよ。心の向きを変えることです。心の向きを変えて、神に一途に立ち向かうことを悔改めという。横を見るのでも自分を見るのでもない。ただひたすらに霊的天を見る。

「悔改、メタノイア」

というのは霊界の天を見るということ。霊界の天に全身をそちらの方に方向づけること。磁性を帯びた磁石が北を指すがごとくです。

それが悔改めです。「悔改め」という言葉が躓きだからよした方がいいですよ。回心、心をめぐらす。あるいは転心、心を転ずる。それをなさったところが、キリストの回心、転心の方向はもの凄いいから、さあ上からきた。水の中からキリストは上がってきたときに、水の回心のバプテスマは同時に、上からの聖霊のバプテスマとなった。これがまず霊界の天が開かれなければ、始末は起きない。この「天国人」なんて言つたつて。霊界の天が開けて、そして、キリストが聖霊のバプテスマを受けました。御霊を受けて、自分を全身に神に向けた。向日葵ひまわりみたい——向日葵というのは素晴らしい花ですよ。あまり太陽ばか



り見ているものだから太陽の姿になってしまったじゃないですか——この向日葵のように
なつたから、神さまは、

「お前は私の姿を映したな」

と。そこで、

「¹⁷また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』」（マタ
イ3・17）

と。喜んだ素質は何かというと、根本的な素質は、

「イエスは自分を何ものともしなかつた」

ということ。自分を投げ出した、投身した。

「あるがままの自分を投身した姿、神の中に自分を投げかけた姿、体当たりした姿」
これが何よりも神さまが喜んだんです。

●無素質・無条件

私たちの在り方の——よく「真実」というようなことを言う。

「あいつは真実が足りない」

とかね。真実なんていうと、なにか道徳的に堅くなってしまうよ、ヘタすると。

「真実、真実」

なんてやっているうちに「パリサイ人^{ひと}」になる。パウロは、もとユダヤ教にいたときは、
彼は真実な男だった。もの凄く熱心で真実な。ところが、それは人を批判するところの、

「俺は律法の義^{おきて}につきては責むべきところはない」

なんて言つて、自分をチャンピオンと思つている。自己義認をやっている。とんでもない。
知らないまに真実が自己義認者になる。

イエスのことを

「善き先生」

と言つたら、

「なぜ私のことを善いと言うか。神さまのほかに善いものはないぞ」

と。即ち、全存在を投げかけているのが、さつき言つた無私である。この全存在をあるが
ままに投げかけているのを、そういう態度を神さまは喜んで、

「われ汝を喜ぶ。汝はわが愛しむ子なり」

と。誰がそのことができなにか、誰でもできるじゃないですか。

「もう少し勉強してから、もう少し聖書を読んでから、もう少し人を愛してから、

もう少しどうしてから来なさい」

ではないんだ。

「お前は今そのままでもよろしい。そのままでいいから、そのまま私のところに来なさい」



い。もうそのままの姿で、破れ姿で来なさいよ」と。それを喜んだんだ、神さまは。

福音書を読んでごらん下さい。キリストが喜ぶ人はみんなこういう質の人です。マグダラのマリヤであろうと、ザアカイであろうと、十字架の盗賊であろうと、何であろうと。イエスの喜んだのは全存在をぶちまけている魂。それを無条件にイエスは受けて、それを引っくり返す。「引っくり返す」というのは生命の世界にグッと入れてしまう。

だから、「天国人の素質」なんていうものは実は何もありません。実は無素質、無条件です。条件がない。どうでなければならんというものは何もない。随分これは逆説的な言葉です、天国人の素質なんてのは無いのだから。

「私は素質があるだろうか、ないだろうか」と、冗談じゃない。

「素質は要りません」

ということですよ。無条件に、誰でもが、万人がこの神さまの喜ぶ人に誰でもがなれる。

「私はなかなか神さまに喜ばれそうにありません。相変わらずこんなことをやります」

なんて言って自分を見ている。自分を見てたら、いつになったら善くなるんですか。そんなこと言ったら、私はもう自分は落第だから、もう御免こうむります。何も要らん。絶対無条件に受けとる世界が、これが最高最深の世界に入る。何も恐いものがなくなってしまう。いいですか。

●無条件であることが義

そういうのがイエスの態度である。だから、さつきから申し上げているでしょ、ドラマだと。

「このドラマの中に自分も一緒に入って、イエスと共に水の中に入りましょう、イエスと共に聖霊を受けましょう」

と。それは実は、あるがままに神さまの前に投げかけることなんです。あるがままに投げかけること、それを無条件にやる。いつも条件付けているのがこの人間というバカものなんでしょうね。何か条件が好きでしょうがないんだな、この人間というものは。ところが、無条件です。

「条件を持っている」「ことを「罪」という。そんなことは私は初めて言う。条件を持っているということが罪なので、「無条件である」ということが「義」なんです。そういう無条件に本当になりきったひとが、キリストの他にいない。残念ながら。いちばん楽なことを、いちばん易しいことを、みんな難しくしている。

「答案を白紙で出せば、私は百点やるよ」

と言うようなものですよね。こんないい世界はないじゃないですか。なにかいろんなもの



を書けば書くほど、マイナスが加わってしまふ。みんな間違つてしまふ。

「神さまの問題の前にはもう私は降参しました」

と言って、白紙を出したら、

「よし、お前には百点やる」

と。そういうのがこの福音の世界です。

だから、この無条件です。キリストが無条件に神さまに自分をぶちまけたら、

「お前はうれしい子だ。お前を喜ぶ」

と。

「お前はどれだけよかったから、こういうところがいいから、私はうれしいよ」

というのではない。

「あるがままに投げ出したから、私はうれしいよ」

ということ。

●放蕩息子はイエス

ルカ伝15章の放蕩息子が帰ってきたときのお父さんが迎えた、あの姿がこのイエスの神さまの姿であり、あの放蕩息子の姿がイエスであるんです。

「放蕩息子はイエスである」

なんて誰が言いましたか、今まで。その放蕩息子の姿になりきってしまったのがイエスなんです。あるがままの自分に。そういうような、

「私はあなたの子というにも値しません。どうぞ、雇い人にして使ってください」

い

と、あの放蕩息子はもう平身低頭お父さんにあやまつてきたら、

「いやいや、お前は本当によく帰ってきた」

と言って、最上に喜んで最上のご馳走をしてくれた。ところが、条件付けて一生懸命にやっている兄貴の方は、

「私はこんなによくやっているのに、あんなけしから野郎を、帰ってきたと言って

お父さんは喜んでいるが、とんでもないはなしだ」

と、憤慨したでしょ。あれがパリサイ人なんです。お父さんと同じ心になって、

「ああ、お前はよく帰ってきたな」

と言えば、それは素晴らしい兄さんです。お父さんと同質の兄さんです。ところが、残念ながら、あの兄さんはパリサイ人、いわゆる宗教家、いわゆる道徳家である。

そういう、イエスの受洗のところで天界が開ける。イザヤ書64章1節をご覧になると、

「天よ、ひらけよ」

という言葉がある。さすがにイザヤ書のあのへんは素晴らしいところです。天界の御霊に



よってイエス自身が突破された。受身なんです。突破というのはこっちから何か力んで突破するのではない。上からきているもので、キリストは神さまの御霊で突破されてしまったから、聖霊のひととしていよいよはつきり、このところでひとつの画期的な事態が起きた。そこからさあその次は何かというと、サタンとの一騎討ちということになる。

天国の事態の一番大事なことは、この御霊によって突破されるということ。これがなかったら、いくら天国についてどうのこうのしようが、その中に入ろうとしようが、入れない。上からの突破によってその突破口に入っていくのでなければ。

●イエス自身が天国人

その次に——荒野の試みはすつ飛ばしまして、これはサタンに勝ってしまったが、今は直接そこに関係ないから——イエスが最初に放った言葉。マタイ伝4章17節、マルコ伝1章14～15節、

「17この時よりイエス教をおしえの宣べはじめて言い給う『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』」（マタイ4・17）

「なんじら回心せよ。心を翻し、魂を翻せ。天国は近づきたり」

と。マタイ伝はよく

「天国」

という。マルコ伝やルカ伝では

「神の国」

という言葉で言って、ヨハネ伝では時々

「永遠の生命」

と言っている。

「心を翻せよ、天国は近づいた」

と。マルコ伝の方では、

「福音を信ぜよ」

と言葉が更につながっています。

「天国は近づいた、やって来た」

と。天国が近づいたというのは、もういよいよ世の終末、終末的な事態をイエスは見ている。この地上にメシヤの国が近づいたと。

「メシヤ」というのは、ユダヤ人は旧約の世界では「メシヤ」というのは政治的に世界を統一するところの、神の神政を地上において行なうところの王者、それを「メシヤ」と考えているわけです。「油注がれたる者」。今でもユダヤ人はそれを夢見ているわけだ。イスラエルの国ができたから、さあこれからだなんて思っているわけだ。ところが、イエスがメシヤたるゆえんはそういう意味ではない。イエスのメシヤたるゆえんは、霊界の王者とし



て、人間の魂の世界に本当の救いをもたらすところの救い主としてのメシヤの自覚。だから、全然それは食い違いであります。

そういう天国人、イエス自身が天国の中心人物です。自分自身が実に天国人として今そこにあります。

「天国はお前たちのところに本当に近づいて来たんだ、この私がいるからねえ」

と。そんなことは仰らないけれども、そういうわけです。天国が現在化してきた。「現在」とか「現実」とかという言葉で言いたい。信仰の世界はこの現の世界です。

● 神の現在に自分が関与する

「信ずる」ということは、

「何かわからないものを、仕方がないから、まあ信じておこう」

なんて、それが信仰だなんて思うけれども、そうじゃない。「信ずる」とは現在という事態に自分が本当に関与することが「信ずる」ということ。神の現在、神的な現在です。その神的な現在、現実というものを、神的な現実を受けとることが「信ずる」ということ。受けとれば必ず神的現実に入るということがなければ、「信ずる」ということが本ものでないということですが、別な言葉で言ったら、

それで、

「福音を信ぜよ、福音を受けとれ」

と。どうぞ、皆さん、この「信ぜよ」という言葉は、

「受けとれ」

というように心の中では読んでください。「信ずる」という言葉がなにか少しまた躓きになってしまつて困るから。信受せよと。信受、受けとりなさいと。

「私は空念仏、空ふだで来ているのではない。本ものだから、受けとれ」

ということですが、だから、

「もう時は満ちた」

と。なぜ、キリストが「時は満ちた」と言うかというところ、イエス自身が本当に聖霊で満たされましたから。聖霊に満たされて、さあこれを本当にみんなにぶちまけてやるという事態が来たから、そこで「時は満ちた」と言われた。イエス自身が本当にひとつのカイロスを迎えて、しっかりと自分がその天国人とならなければ、「時は満ちた」なんて仰らない。

そういう接近。言い換えると、神の本願を受けとつたでしょ。神の本願を受けとつて、この本願と、天国人即ち神の本願体が接近したんです。

「本願体が近づいてきた。だから、お前たちはさあ喜べ」

と。「福音」というのは喜びの音信です。

「この喜びの音信を受けてみる。お前が本当に喜びの音信、福音体となるぞ」



と。もう観念でないから、私はこの「体」の字を使いたいわけです。お前たちが福音体となる。こういう宣言をされた。

●無いのが幸いだ

そこで我々がその次にどうしても注目したいのは、いわゆる「山上の垂訓」の序曲のところです。マタイ伝5章3節から12節。山上の垂訓と申しますと、また教えたと思う。勿体ぶってしまおう。

「³幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。」（マタイ5:3）
これは、私はキリストの言葉の中で一番好きな言葉といってもいいくらいです。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。「心が貧しい」とはどういうことでしょうかというわけです。

ところが、「心」という字は実は「霊」という字で、魂です。「プニユーマ」「ルーアッハ」という。梵語で——私は梵語を知りませんが——「アートマン」という。これは「息、氣息」という意味です。それから「私、我」という「自身」。それから、私の主体となるところの「霊、魂、心」。それがヘブライ語になると「ルーアッハ」という。これがやはり霊であると同時に、気でもあるし、風でもある。ギリシア語の「プニユーマ」がそうです。語系が、セム系統とインドゲルマン・アーリアン系統とちがいがいながら、ある同じ事態を表す言葉が同じような類似の概念を持っているということが非常にもしろい。これが即ち、霊の世界です。

この霊が——即ちここでもって言うところの「プニユーマ」が、「アートマン」が——「貧しい人」とは、「自分というものが貧しい人」ということで、それがさっき言った無私なんです。私の無い、私心の無い人。無私心、私心の無き人。無というのはニヒリズムの無ではないですよ。私心が無いこと。そういう、

「私ごころのない人は幸いなるかな、天国はその人のものである」

と。「何かがあれば幸いだ」と言っているのではない。

「無ければ幸いだ。無いのが幸いだ」

と言っている。一番中心の霊とか、自分というものが、何かこだわりがなくて、本当に明け渡されている。さっきのキリストのあの洗礼の事態が「霊が貧しい」ということ。霊が貧しいとき、ぶちまけていると、もの凄い神の豊かな霊がくるんです。

この「無」という字は、

「天蓋、大空の下に甘、甘の林」

という字が無という字の本来の字なんだ。四十の林、無数の木がある。天蓋の下に無数の木がある。森の木が数えられない。無数である。無数が「無」であると。無即無数という、無即無数無量という。だから、私は、漢字は素晴らしいなあ、世界最高の文字であると、



この無という字を見て思ったわけです。自分が無いということが無限である。無即無尽蔵と禪宗の方でもいうではないですか。

そういうように何にもとらわれない。自己にとらわれない。自己にとらわれない本当の人がなかなかいないわけですよ。ソラクテスが一生懸命でアテネの道角で昼間、カンテラを持って何か探している。

「何を探しているんですか、あなたは？」

と聞かれて、

「人を探している。人らしい人がいるかと思って」

と答えた。人がいない。そういつたこだわりのない人がいないという。

「人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ人」

という伊藤仁斎の歌があつたね。

●天国人の素質は無

そういう、

「私無き人こそが幸いである。天国はその人のものだ」

と。何かがあればよろしいというのではなく、

「無いことが本当の素質だ。天国人の素質の極まるところは無であるぞ」

ということ。本来持っているものではなかった。本来持っているものは、本当は素質というんだけど。本来持っている素質はみんなダメなんだ。

「本来持っている素質はみんな棄てましょう。そうしたら、天国人の素質というものができました」

と。こんな話は私は初めてするんですよ。

そういうようなことになった。けれども、これを言われたって、我々はどうにもならんでしょ。キリストは頭でものを言わない。全存在をもって言を発している。彼自身が即ち神の言だというじゃないですか。まず、

「**太初に言あり、言は神と共にあり、言は神なりき**」

という。あの「言」は即ち靈言、キリストそのものである。彼自身が即ち、神の靈言そのものである。だから、彼が発する言は、これは本ものの言なんです。イエスが發する言は全部、本の言もとというものから發している——本当の本言もとという——本の言もとから。彼が即ち「ウル・シュプラーヘ」「ウル・ヴォルト」なんだ。根源の言である。真言なんだ。キリストこそが真言宗の親玉なんだ。そのキリストという真言が發するから、そこで、イエスの言は全部、全存在から發しているから、告白だという。教えではない。福音書に書かれているイエスの言は全部、告白であります。「ベケントニス」、大告白。

「山上の大告白」



と私は言う。「山上の垂訓」なんて言わない。

山上の大告白の第一言。イエスは自分が、霊が本当に神さまの前にぶちまけた貧しい者であった。天国即ち神がわがうちにあった。これが即ち、このいわゆる山上の垂訓の第一言の本義であると私ははつきり受けとります。世界にいくつ註解書があつたつて、そんなことはおそらく書いてないかもしれません。いいですか。

であるから、私は真似したつてできませんから、イエス・キリストの中に自分を投げかけるよりか仕方がない。では、キリストの中にどこから入りましようかと。

『ファウスト』でいうと、メフィストのやつがどこかに閉じ込められて外に出たい時に、^{ごぼうせい}五芒星——これは魔術の記号——のちよつと角のところをネズミがかじつて開いている。そこから出て行こうという、そんなことが書いてあるけれども。では、キリストの中に入るのに、どこかネズミのかじつた所がないかと。イエスという満月みたいな人に、ネズミのかじつた所がないかと。それがあるんだ。それはネズミではなかつた。イエス自身の十字架であります。

● 十字架という門

このキリストの十字架というのは、

「我は門なり」

とキリストは言つたでしょ。門の中に十の字を書く。こんな字はありませんよ、字引に。これは私が製造したんだから。門構えに十字架を書いたこの「門に十」という天下第一品の字が——諸橋先生の漢和字典というもの凄い字典がある。世界最大の漢和字典です——その中にもこんな簡単な字がないんだよ。難しいたくさんの字があるにもかかわらず、シナ人はこれだけは気がつかなくつた。私はこれを付け加えてあげたいけれども、そうはいかんらしい。この門構えに十字架の、十字架という門でもつてここが開いていた。ここから皆さんは入る。その他から入つてはダメですよ。

「他の門から入る者は盗賊だ」

とキリストがヨハネ伝10章で言つている。私たちは盗人にはなりたくないから。十字架というこの場合は、

「私は、おまえの我^がというやつはみんなこの十字架で引き受けたよ」

と。「我」は即ち罪の主体であります。「罪びと」の主体はこの我とやつ。実は「アートマン」というのは素晴らしいものだよ、本来は素晴らしいものであつたものがその実質を失つてしまつて、我^がとなつてしまつた。そのガがチョウに変わらなければいかんわけです。

そういう十字架という門を通つて無条件にキリストの中に入つて——私は我が贖われませんでしたから、我という自我という罪から私は贖われまして——もう楽になつた。相変わらず私は自我がありますよ。けれども、そんなものはや問題でない。



「そんなものは苦しめたってしょうがないから、こっちを見なさい」

という。キリストの十字架の門を見て、そして我をとられて、本当にこの中に入ったならば、このイエスの中は何かというところ、イエスは聖霊に満たされていますから、御霊に充滿している。この御霊で充滿している中に入ってみたら、御霊の世界だった。そうしたら、御霊のバプテスマを自然に全存在に受ける。あなた方はこの部屋に入ってくればこの中は空気がだから、その空気の中で息を吸っていると同じように、新しい魂とならざるをえない。

● 入れば御霊の世界

どうぞ、皆さん、仰いでばかりいらないでくださいよ。「しんこう」というならば、信じ交わる「信交」と書いてください。パウロがガラテヤ書2章20節で、

「われキリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず」

と言った。そしたら、その次に何と言いましたか。

「キリストわが中^{うち}に在りて生くるなり」

という。

「キリストわが中^{うち}に在りて生きたもうなり」

と

「われキリストの中に生くるなり」

とは同じことですよ。

「キリストわが中^{うち}に生くるなり」

というの、

「キリストの御霊わが中^{うち}に生くるなり」

ということ。入れば御霊の世界ではないですか。本当に十字架を受ければ聖霊が必ず来るといふ事である。そのことを本当に全存在をぶちまけた祈りの世界でやっていないから、いつまでたってもキリスト教の世界は始まらない。硬化現象を起こし観念現象になってしまった。これがもう焦点である。盲点である。

皆さんは、もう絶対にこの現実を、この質の中に入らなかつたら、いく年キリスト教を、聖書の研究をやってもダメですから、はっきり私は言っておきます。キリストという門を本当に入って、入つたら、そこは聖霊の世界であった。

「本当に自分をぶちまけて、平伏しの祈りの世界に入つたら、この事態に来まし

た。もう誰が何と言おうと、これは否定することができない現実であります」

と、信交は。信じ交わっている世界です。キリストとの霊的な交わり、世界に入っているんだから。もう私は第二の宗教改革がなければいかんと思っている。「信仰」の「仰」の字なんかやめてしまう。もう憎まれてもなんでも仕方がない。少しやらなければならぬと正直思ってます。



弟子たちでも、そこまで入らないうちは、いくらパウロがどうであろうと、ペテロがどうであろうと、ヨハネがどうであろうと、ダメなんだ彼らは。そこに入らないうちは、いくらキリストと一緒に飯食ったってダメなんだ。キリストはそれを知っている。

「私はどこまでもあなたについて行きますよ」

なんて、ペテロが大いに意気込んで言ったって、

「いや、おまえはそのうちに、鶏が二度鳴く前に三度私を否むぞ」

と。その通りになって、否んでしまった。いくら悔いて涙を流したってしようがない。いくら悔い改めようたって、悔い改めるなんてことでは悔い改まるものではない。泣いたってしようがない。

「だけれども、いいよ。祈って待っている。そうしたら、私は今度は御霊となつて

おまえの中に入るから。そうしたら、おまえは本当のものになるぞ」

と。これがペンテコステの事態なんです。そこからキリスト教の歴史は始まっている。もう事実そうなんです。

どうぞ、そういうわけで、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

とは、

「幸いなるかな、汝わが十字架という門を通つて、わがうちに入った者よ、天国即ち聖霊のわれ汝のうちにあり」

と。天国人の資格は、資格も素質も何もない者に、本当の素質が与えられるのはこの御霊の事態であつて、御霊の事態のないところに天国人の素質なんてものはありはしない。万人は天国人の素質を失っていたが、また万人は天国人の素質を新たに受けとることができるといふことです。これが大前提であります。それが読めると、あとはスーッと読める。

● 聖霊は慰め主

「幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。」（マタイ5:4）

「幸福」というのは、ヒルティが『幸福論』で「グリユック」と言ってますが、本当の幸

福はここなんだけれども。悲しみにもいろいろ悲しみがある。皆さんも、常にいろいろな悲しみにぶつかるとして。そのさまざま悲しみ、どんな悲しみでもいいけれども、その人は慰められる。誰に慰められるのか。言うまでもなくキリストである。本当の慰め。ヨハネ伝にも書いてあるとおり、聖霊は「慰め主」ともいう。御霊は慰め主。聖霊によって慰められる。

「わが霊によって慰められる」

と。聖霊は慰め主、「助け主」ともいう。その慰め主、助け主の御霊が天界から出張してくださるから、皆さんの中に自由自在に。



宗教の世界はみな説明することのできない世界です。体験するよりか仕方がない。お釈迦さんも、

「八万四千の法を説いたが、実はひとつも説かなかった。おまえたち自身で体験するまではどうにもならんよ」

ということですよ。その助け主が、慰め主がくれば、どんな人も——まあ人間もそれは人から慰められたってわるくはないさ。だけれども、それはある程度までだ——本当の慰めはこの聖霊でなければできない。慰めることのできるものは、力を持つていなければダメです。それはどういう力か。喜びに転ずる力を持つている。ただ慰められて、

「まあまあ仕方がない、あきらめよう」

なんてではない。この慰め主は喜びの世界に転ずる、喜びを与える慰め主です。どんな行き詰まった事態でも、どんな悲しい事態でありましても、それを喜びに変えることのできるものは、御霊の、キリストの霊の他にありません。パウロがどんなに迫害されても、牢屋に入れられても、そこから

「喜び喜べ」

といって人を喜ばすところの書簡を書いているではないですか。獄中書簡というエペソ、ピリピ、コロサイという素晴らしい二つの書簡です。

そういうわけで、

「もうどうなってもいいです。絶対に自殺はしません。絶対に絶望はしませんよ」

と。そういう人になる。福音の世界はとにかく、

「何々を信ずる」

とか、そんな信仰箇条をあげたり、そんなことではないですから。そんな何だかケチ臭いクリスチャンがいたら、

「おまえはそれでもクリスチャンか」

と言ってやりなさいよ。もう自由自在なものです。クリスチャンのくせにくすぶった顔なんかしたら、そんなものはウソものですからね。どんな苦しみの中にあっても、ハハハアなんて言つてバカみたいな顔している。女の方だったら、微笑みを浮かべている。そういうゆとりのある魂になる。

●世界に大和をもたらす大使命

「幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。」(マタイ5:5)

柔和で私は思い出したから、皆さんに何をこれから引用するか驚くよ。仏教の大元祖の

聖徳太子です。聖徳太子が十七条の憲法をつくった。その第一条に、

「和を以て貴しと為し、忤つること無きを宗とせよ。」

と。これが柔和なる魂。



「和をもつて貴しとなし、逆らうことなきをむねとせよ」

と。「和」は「やわらぎ」と読む。「忤^{さか}うる」は不従順、不順なことです。ミルトンが『パラダイス・ロスト』の一番先に書いたあの「デイスオビーディエンス」という字です。これが憲法の第一条だから。およそ今の憲法とはちがひ、もつと非常に宗教的なものです。

「和^{やわらぎ}をもつて貴^{とうと}しとなし」

とは和です。我々の民族は大和民族^{やまと}という。どうして、我々がこういう素晴らしい字を持ちながら、それを空念仏にしているか。もう惜しくてしようがない。

日本の国旗は世界最高の国旗です。太陽が輝いている。なにも国粹を言っているのではない。その本質をなぜつかまえないかということ。大和は、世界に大和^{たいわ}をもたらす民族としての大使命を持っているくせに、なんと魂が涸渇しているか、歪んでいるか。大和魂^{やまと}とはそういう大和をもたらす魂を大和魂という。和らぎをもつて世界に大平和をもたらす——何かどつちかに、東にも西にも傾いているんじゃない——日本は本当の中道を行かなくては。中道というのはシナ人の好きな言葉だけれども。それから、

「幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。」（マタイ5・

9）

とあるでしょ。従順であつて、本当に神さまの前に従順である。即ち、

「汝の御意を成させたまえ」

というのが順の姿です。それが本当の和らぎをもっている。即ち、イエス・キリストがこの和のひとなんです。「小羊」といわれる。牧者の胸の中に抱かれている。イザヤ書40章に書いてある。その小羊のごとく、神さまの羔^{こひつじ}は従順で神さまの言うことを聞いて動いている。牧者の言うことを聞いて、あつちやこつちへ行く。詩篇の23篇。イエスはなんで羔といわれるかという、神さまの御意のままに動いているひとです。聖意を体現するひとです。聖なる意志を身体でもつて現象するひとです。聖意体現者でキリストはあつた。これが柔和なる者、心の和らぎを持っている者。それが今度は、人に和をもたらすものになるんです。縦に順なるものが人に和をもたらすものになる。

それが和らぎをもつて旨として、逆らうことがない。即ち、不従順はダメだよ。封建時代のなにか屈辱的な、絶対権威というものは感心しませんよ。けれども、神と人との間の関係においては、神さまはそんな権威で我々を押しつけているのではない。神さまは大きな大愛をもつて私たちを導いている、守っている。そこに本当の権威を持つた権威です。聖なる意志は絶対的なものですから、それに全托していけば、こちらに絶対的な質がやってくる。相対^{たいたい}においての絶対性^{たいたいせい}というものがくるわけだ。

相対における絶対性^{たいたいせい}というのは、相対なものをそのまますぐ手放して絶対化するからとんでもないことになる。それが我^がというやつです。それですぐ角突き合つて、もうさんざん国際関係はみんなそれです。いいじゃないですか、日本は日本、中国は中国、ドイツは



ドイツ、ソ連はソ連、アメリカはアメリカで。みんなそれぞれの民族と国家の特色があるんだよ。お互いさまに大いにそれを尊重して、そして、欠けたるは補い、有無相通じて善きものをもって互いに信じ和していけば、それが本当の和となる。それはみな、それぞれの個人が、社会が、国がみな、絶対者をここに縦の關係を持つっているか。この次元を持つているかが大事なんです。この縦の次元を忘れては、どうしてそういうことを言っているんですか、今の教育は。今の教育は、

「宗教のことはちょっと待て」

なんて。なにくだらないことを言っているか。そんな御利益宗教なんかやっているからいかん。本当の絶対的な宗教的な角度のことは普遍的な真理です。その普遍的な真理をなぜ言っているのか。

●天国人が仏法僧

それから、第一条に聖徳太子はさすがにこの憲法で宗教を持ってきた。

「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。」

と。「三宝」というのは如来と仏法と、仏法を一生懸命で身に体しようとしているやつている坊さん。この三宝を敬えという。

これを福音でいうと、パウロがローマ書8章2節で言っている

「いのちの御霊の法」

は靈法であります。「僧」はもう要らん。みんなが坊主になればいい。即ち、万人これキリスト者。御霊の人。御霊の人は即ちこの僧なんです。我々は本当の意味における僧なんです。これが今日言っている天国人です。「仏」はキリストに決まっている。キリストと靈法即ち福音です。キリストと福音を身につけているのが天国人です。これが「仏法僧」なんです。そういう事態を貴しとせよということなんだ。仏の世界でそういうようなことを言っている。

それから、山上の垂訓に、

「幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。」(マタイ5:6)

とあるでしょ。みんなこれは天国人の新しい素質といえますか、天国人はそういうようなことになって、そういう人たちは天国人であるよということですよ。

●信は義のもとなり

聖徳太子の十七条憲法の第九条に、

「九に曰く、信は是義の本なり。事毎に信有れ。其の善悪成敗、要信に在り。群臣

共に信あらば、何事か成らざらん。群臣に信尤んば、万事悉く敗れん。」

一番先に、



「信は是義の本なり」

「信は義のもとなり」とある。信は即ち義のもとである。君臣の関係を言っている。君臣の関係が本当に秩序が立っていることを「義」と言ったわけだ。上の人と下の人との関係が、秩序がちゃんと立っていることを義と言った。義理人情なんていう。「信」というのは本当に人を裏切らないことです。これはヒルティも言っている。

「人間の持つている素質の中で一番大事なものはこの信である」

と。裏切らない心です。神と我との関係、人と人との関係で裏切りのないこと。

私はもう集会を27、28年もやっていて、幾人かの人に裏切られた。私がわるいからでしょう。いいです。

しかし、人間は誰でも仏性を、神性を持っている。これは人間であるかぎり頂いているんですから。頂いていなかったら、どうして神さまのことを慕うことができますか。慕うことができたって、どうしてもダメだというのがこの情けない事態なんですよ。パウロもロマ書7章で言っているではないですか。

「我は善なることを知っている。それを一生懸命でやろうとしているが、わがうちに別な法があつて、どうにもならない。ああ我は悩める人なるかな、この死のからだより我を救わんものは誰ぞや」

と。願いはあるんだけど、それは悲願であつて、本願に靈願に代わらない。悲しき願いなんだよ、正直。悲願がなかなか成就しない。本願が来なければ成就しないんです。本願がくるところに初めて悲願が成就される。親鸞が『歎異抄』の中でも言っているとおりです。

そういう、人間にはみな悲願がある。そして、うちにその灯火がみな灯っている。その微かな光を見てお互いに、

「ああ、あの光を本当に燃やしてあげましょう。それを信じていきましょう。あの人にはずいぶんマイナスの陰もあるけれども、そんなことは心配いらん」

と。その一番大事なところを見ながら、信じながら、それに対して本当に信をもつて貫くところに信義というものがある。だから、

「信は是義の本なり」

という。そこに本当の関係が立っている。その信があれば本当の関係が立つよという。神さまの御意を「然り」と言つて、己に対して「否」と言っているが、この宗教的な世界の「信」の姿なんです。

「汝は然り。我は自分に対して否」

これが無私の世界です。そうしたらば、

「アブラハムはエホバを信とした。エホバはこれを彼の義とした」

という。これがちょうどそうです。アブラハムは神さまを「信」としました。そしたら、



エホバはそれを「義」としたと、創世記15章6節に書いてある。

そういうような信義です。これが十七条憲法の第九条にこういうことが書いてある。私は素晴らしいなあと思つて、新しく見直した。福音の世界でみると、方々に真理がこぼれてますからね。日本人は、日本人が本来持つていた大事な宝をもう一遍掘り出して、それつにもうひとつ新しい天来の光を当てて、これを本当に生かしていくことが過去を生かすゆえんである。将来を来たらせるゆえんである。日本人はそのことをもう一遍またやり直ししなければいかん。真理は東西古今至るところにあるから、全部包摂してくださいよ。そういう大きな魂に、福音の世界は私たちをしてくれるんです。

●キリストの愛憐が流れていく

いわば、この山上の垂訓に出ているような、

「幸福なるかな、^{あわれみ}憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。」(マタイ5:7)

と。私たちはキリストに憐れられました。どん底から憐れられました。この悩める者、この死のからだの者をキリストの絶対の恩寵によつて憐れまれて、そして、十字架を通してこの救いの世界、聖霊の生ける世界に入つて、これ以上の^{あわれみ}憐憫があるですか。

でありますので、いよいよ憐憫がその人にかかつてくる。その憐憫を受けた者が人に対して本当の憐憫を持ってないことがないはずである。キリストの愛が、キリストの愛憐が私たちを通して流れていくわけです。これみんな天国人の素質であります。

「幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。」(マタイ5:8)

と。「神」といつたつて、なにか髭のはえた、あのミケランジェロが描いたような神さまではないですよ。ミケランジェロはそんなものを描かなかつた方がよかつた。

イエスは、「神を見ん」と言つたときに、霊界の消息に本当に深く自分が入つて、神的なものを見るがごとくにその世界に自分の魂が生きるような、そういうつた事態を「神を見ん」と仰つたのでしょうか。

「心の清き者」という。要するに「清き」ということも、自分が外れていれば、そこはもう無色透明な世界ですから、色あいがありませんから。我々の目の水晶体は無色でしょ。だから、いろんな色が映つて見えてくるわけです。私の目玉がもし黄色だったら、そういうように見えない。都会の蛍光灯ではダメですよ、山の中に行けば、太陽の光でそのままに見えてくる。即ち、濁りのないところの魂、さつき言つた霊が貧しくなると、無色になる。霊が貧しいということと心の清きということが相即してくるわけです。そうすると、神さまの事態に自分が本当に活眼されてくる。

「幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。」(マタイ5:10)

と。わが義のために、このわがキリストの——キリストは義人である。神の御意を現象し



た者が即ち義人でありますから。ただの正義ではない——そういった義のために責められる者、天国はその人のものであると。さまざま悪しきことを言われ責められたら、かえって喜びなさい。みんなそれは天界において逆に本当の結果がくるからと。

今、山上の垂訓で畳みかけて書いてある事態はみな、この第一言の突破をしたときに生じてくるところの事態のこの素質、天国人的な素質がそこに並んでいるから、私はそう言つたわけです。これが天国の内的な要素といえますか、素質になった。そうみていいと思うんです。

●至る所これ天門

さつきちよつと引用することを忘れたんですが、「天国の門」という。これは創世記28章で、ヤコブが旅で石を枕にして寝た。夢をみた。そうしたら、天から梯子はしごがかかってくる。御使が上り下りするのが見えた。そして、目が覚めて、

「ああ、ここが天に通ずる門であった」

という、非常にうるわしいひとつの情景がある。いつでもいかなる所にもそこが即ち、聖霊の梯子、天との交通がある所でありまして、どうぞ皆さんは、至る所これ天門として、そこに本当の喜びを見いだす。これはルターが『クリスチャンの自由』の一番終りのところにもそのことを引用して書いてます。何ともいえない輝かしい喜びの世界に入ってくるわけです。

第一回として私が今ここで申し上げたいのは、そういったような天国人としての素質が、山上の垂訓にのっているような、こういった事態の性格が新しく私たちの中に第二の天性として出来上がってくる。それはなにか修養によるのではなかった。ただイエスを、このキリストを無条件に受けとるところに山上の垂訓の事態は私たちに現実となってくる。この山上の垂訓のこの天国人、

「幸福さいわいなるかな」

と言われているこういつたようなことがひとりの人において渾然として一如になるんです。どれかではない。渾然こんぜんとして一つにこのようなことになってくるといことが、天国の内的な、私たち個人におけるところの内的な素質として、天国人の素質として、まず深くキヤッチされなくてはならない。それから何が起きるかということはこの晩のお話にいたします。

